

第117回 岡山外科会

と き：平成4年2月15日（土）13時より

ところ：岡山大学附属図書館鹿田分館3階講堂

会 長：折 田 薫 三

（平成4年3月17日受稿）

1. 示指に石灰化腫瘤を生じた一例

岡山大学整形外科 玉田利徳 橋詰博行 住居広士
尾崎敏文

最近我々は、示指に石灰化腫瘤を生じた一例を経験した。偏光顕微鏡所見・ICP発光分光分析法により結晶成分はピロリン酸カルシウム（CPPD）と考えられた。CPPD結晶の関節軟骨や周囲軟部組織への沈着はよく見られ、結晶

誘発性の関節炎を来すが、腫瘤を形成するのはまれである。現在までに9例の報告があるのみで、指に生じたものは、そのうち4例であった。ほとんどの症例で悪性腫瘤との鑑別に苦慮していた。

2. 四肢に多発した神経鞘腫の1例

岡山大学整形外科 西田圭一郎 橋詰博行 尾崎敏文
井上一郎
岡山大学第二外科 吉富一郎

最近我々は、左足背皮神経、左尺骨神経、左正中神経の3つの異なる四肢末梢神経に、数年の間隔をおいて順次発生した多発性神経鞘腫の1例を経験した。鑑別診断としては、神経線維腫症、単発性神経鞘腫の局所再発、悪性神経原

性腫瘍の再発、良性腫瘍の悪性転化等が考えられた。治療につき、神経鞘腫の時間的空間的な多発例は、可能な限り切除するべきであると考えた。

3. 黒坂スクリューを用いた膝前十字靱帯再建術の経験

岡山済生会総合病院整形外科 杓永俊彦 守都義明 梶谷 充
原 誠之助
岡山大学整形外科 井上一郎

我々は clancy 法に準じ、膝蓋骨・脛骨の骨付きで採取した膝蓋腱を黒坂スクリューで固定する方法により、膝前十字靱帯の再建をおこなった。本法により強固な初期固定力が得られ、早期可動域訓練が可能である。症例は男性2例・

女性1例であり追跡時の日整会評価は95・75・95であった。臨床的にも、中点法によるX線評価でも不安定性はなかった。再建後は現職やスポーツ活動に以前と同様に復帰していた。

4. 仙骨不全骨折を来した RA の 3 症例

岡山市立市民病院整形外科 石川 聡 渡辺 唯志 林 充
吉村 一穂 壺内 貢

今回我々は normal な stress が脆弱な骨にかかって起きる不全骨折が RA 患者の仙骨部位に生じた 3 例を経験し、2 例は二次性骨粗鬆症、1 例は病的骨折によるものであった。このよう

に骨脆弱性を基盤にした原因不明の腰臀部痛や下肢放散痛を主訴とする患者では本症例を疑う必要があり、その診断には神経学的検査及び骨シンチ検査等による画像診断が有用であった。

5. 頸椎椎間関節脱臼骨折について

岡山労災病院整形外科 加原 尚明 島田 公雄 原田 良昭
山名 圭哉 高橋 雅也

頸椎脱臼骨折における骨損傷の様態、またその治療法は様々であるが、今回我々は、当院における、過去 7 年間の頸椎脱臼骨折のうち椎間関節脱臼症例 48 例につき検討した。脱臼骨折の様態は、両側椎間関節脱臼 23 例、片側椎間関節

脱臼 25 例であった。本損傷に対しては、まず Slow Reduction を試み、その成否と麻痺の様態によって対応を考えるべきであり、手術療法としては、前後同時固定法が安全で確実と思われた。

6. 上腕骨頸部骨折の治療経験

岡山大学整形外科 甲斐 信生 花川 志郎 井上 一
光生病院整形外科 佐藤 徹

過去 3 年間に、上腕骨頸部骨折に対して逆行性髓内ピン固定法を行った 10 症例について検討した。

逆行性髓内ピン固定法は、保存的療法の非侵襲性と、早期からの可動域訓練を行いうる固定

性を備えたものである。

治療結果、全例骨癒合が得られ、早期からの運動療法により ADL 上不自由の無い可動域が得られた。

7. 大腿骨頸部骨折—両側例の検討—

岡山赤十字病院整形外科 小谷 泰広 佐伯 祐司 宮本 宣義
小野 勝之 三宅 完二

14 年間に当科で治療した老人の大腿骨頸部骨折 279 例のうち、両側例は 14 例 (5.0%) であった。これは諸家の報告した頻度と同程度であり、片側を骨折すると対側を骨折する割合は非骨折者の 20 倍近くも増してくる。

また、初回骨折と対側骨折の受傷時の状態を比較したが、いずれの点でも目立った相違はなかった。対側骨折予防のためには、骨折の治療にとどまらず、骨粗鬆症の治療や、生活環境に対する指導も必要と思われた。

8. 潰瘍性大腸炎患者に続発した脳幹部梗塞の1例

岡山大学脳神経外科 福原 徹 衣笠 和 孜 大本 堯 史
光生病院 槌田 昌 平

潰瘍性大腸炎患者に脳梗塞を合併した症例を経験した。左片麻痺にて発症し構音障害も認められたが、感覚障害はなく pure motor hemiplegia の状態であった。脳血管撮影で異常所見なく、MRI にて右脳幹部梗塞が描出された。現

在までに報告されている潰瘍性大腸炎と脳梗塞の合併例では、発症は腸炎の活動期に多く、原因として凝固系の異常のほか脳血管の炎症などが考えられており、本例の血管閉塞機転について考察を加えた。

9. 皮質下転移性脳腫瘍の術前検査として MRI 脳表描出法 (SAS : Surface Anatomy Scan) が有用であった1例

岡山労災病院脳神経外科 廣 常 信 之 和 仁 孝 夫 諸 岡 弘
難 波 真 平
岡山協立病院 原 田 泰 弘

症例は66歳、男性。平成3年11月に、左片麻痺出現し、当科外来受診後入院。全身検策にて、肺腺癌の脳皮質下転移と診断された。頭部開頭手術施行し、その際、術前検査としてMRI 脳表描出法 (SAS : Surface Anatomy Scan) を

施行した。SAS は、TE の著しく長い高度のT2強調画像を利用したもので、手術の際の予定皮切部位、術野脳表構造、病変部位へのアプローチ法を術前に把握でき、大変有用であると考えられた。

10. 特異な解離を呈したマルファン症候群の1手術例

川崎医科大学胸部心臓血管外科 福 廣 吉 晃 藤 原 巍 土 光 莊 六
稲 田 洋 正 木 久 男 山 根 尚 慶
勝 村 達 喜

症例は59歳、女性、Hardy 手術を施行後、新たに DeBakey III a 型解離性大動脈瘤を認めたため、補助手段として左心バイパス、一時的右大

腿一左腋窩動脈バイパスを用いて、下行大動脈人工血管置換術、左鎖骨下動脈再建術を施行したので報告する。

11. 川崎病に対する冠動脈血行再建術

川崎医科大学胸部外科 山 根 尚 慶 藤 原 巍 土 光 莊 六
稲 田 洋 正 木 久 男 吉 田 浩
勝 村 達 喜

3歳時発症の川崎病13歳男児の三枝冠動脈病変に対し両側内胸動脈を用い血行再建を施行した。

12. 胃大網動脈を用いた冠狀動脈血行再建術の検討

心臓病センター榊原病院 濱 中 莊 平 畑 隆 登 難 波 宏 文
津 島 義 正 手 塚 光 洋 村 上 貴 志
八 島 正 文 谷 口 堯

GEA は、内胸動脈、伏在静脈に次ぐ第三の graft 材料として内胸動脈等を用いただけでは制約のある CABG に有用で、良好な開存性を得ることが期待できる。しかし、使用上の問題として、術中に Spasm が内胸動脈に比し容易に

誘発され、flow を十分に得ることのできない場合がある。術前の GEA 造影は、血管反応性を評価する上で必要な検査であると考えられ、更に、走行上の個体差を確認する為にも術前に行っておくことが望ましい。

13. YAG-LASER を使用した肺部分切除術の経験

国立岡山病院呼吸器外科 沢 田 茂 樹 東 良 平

今回我々は、肺部分切除の 6 症例、7 回手術に Nd-YAG laser を使用し良好な結果を得たのでこれを報告する。Nd-YAG laser は切開、止血能に加え肺野や細気管支に対する air leak 防止能に優れている。転移性肺腫瘍などで肺部

分切除を複数回行う症例では、GIA 等による肺切除に比べ残存肺の damage を最小限に抑えることができ有用であった。また肺門部血管に近接している腫瘍の摘出も安全に行えた。

14. 腹部大動脈瘤ならびに腎癌の同時手術の 2 例

岡山大学心臓血管外科・第二外科 柚 木 継 二 内 田 發 三 越 智 吉 樹
杉 山 章 古 元 嘉 昭 寺 本 滋
岡山大学泌尿器科 津 島 知 靖 大 森 弘 之

今回私たちは、腹部大動脈瘤ならびに腎癌の同時手術を 2 例経験したので報告する。一期的

に安全に手術が可能であり、積極的に同時手術を行うべきであると考ええる。

15. 大腿動脈押圧止血器 Femo StopTMの使用経験

国立岡山病院心臓血管外科 為 季 清 和 永 広 格 森 田 照 正
谷 崎 真 行

心臓カテーテル検査及び血管造影後、大腿動脈穿刺部圧迫に Femo StopTMを 20 例に使用した。3 時間の圧迫と加圧の漸減にて合併症なく全例止血を得た。収縮期圧 + 30mmHg にて 2 例初期止血不可であったが、カテーテルのサイズ、

動脈内留置時間及び抜去時収縮期血圧、ヘパリンの有無、穿刺血管、及び年齢との間にそれぞれ有意の相関は認めなかった。用手圧迫枕子固定と比べ、結果はむしろ良好で、術者は楽であり他の仕事が行えた。

16. 挿管困難患者に laryngeal mask を使用した一症例

岡山大学麻酔科蘇生科 木 山 環 小山 祐介 金城 実
株 丹 浩二 時岡 宏明 森田 潔
小林 尚日出 平川 方久

laryngeal mask は低圧のカフで喉頭を包み込む新しい気道確保の方法で、わが国でも普及しつつある。我々は小顎症と顎関節拘縮による開口障害が高度で挿管が困難な幼児に laryngeal mask を用いて術中の呼吸管理を行った。さら

に手術終了後に laryngeal mask を利用した気管内挿管を行うことができた。患者に苦痛を与えることなく安全に気道確保のできる laryngeal mask は挿管困難症の幼児にとり非常に有用であった。

17. MRI が診断に有用であった Morgagni 孔ヘルニアの1例

岡山大学第二外科 泉 貞言 寺岡 広道 清水 信義
寺 本 滋

今回我々は大網のみを内容とする Morgagni 孔ヘルニアを経験しその確定診断に MRI が有

用であったので報告した。術式は術前に確定診断がつけば開腹による閉鎖術が妥当と思われた。

18. 大網小網裂孔ヘルニアの1例

川崎医科大学附属川崎病院外科 溝 上 宏明 小山 昱甫 吉田 一典
安 田 俊子 月山 雅之 木曾 光則
松 井 俊行 光野 正人 川崎 祐徳

我々は、大網小網裂孔ヘルニアの1例を経験し、病理学的にも興味ある所見が得られたので報告する。症例は55歳、男性。発症する2ヶ月前に腹部打撲の既往歴がある。イレウスとして発症し、胃透視、超音波検査、CT、イレウス管

による消化管造影にて網嚢裂孔ヘルニアの診断を得ることができた。治療は回腸部分切除、裂孔閉鎖を行った。切除標本で漿膜下層の肥厚、膠原線維の増殖、弾性板形成が認められた。

19. poor risk 十二指腸潰瘍穿孔例に対する大網充填法

国立岡山病院外科 野 村 修一 山野 寿久 沢田 茂樹
永 広 格 松本 英男 藤岡 正浩
平 井 隆二 白 井 由行 田中 信一郎
佐々木 澄治

十二指腸潰瘍穿孔6例に大網充填法を用いた穿孔部閉鎖をおこなった。穿孔口の大きい1例で再手術を要したが他は術後良好に経過した。

poor risk 例や穿孔部処理のむずかしい症例には有用な方法であると考えられる。

20. 切除し得た胃癌切除後 Schnitzler 転移の一例

岡山済生会病院外科	山 辻 知 樹	大 原 利 憲	本後 登志江
	繁 光 薫	浜 田 円	枝 広 徹
	岡 本 康 久	戸田 耕太郎	三 村 哲 重
	木 村 秀 幸	筒 井 信 正	広 瀬 周 平
	北 村 元 男	片 岡 和 男	

64歳女性。内視鏡で Borrmann 3 型胃癌を診断され胃垂全摘 Billroth II 法施行。組織診断は、 tub_2 , $INF\beta$, se, ly_1 , v_1 , n (—)。4 年後排便困難出現。肛門より約 5 cm の直腸に狭窄認め、開腹す。腫瘤はダグラス窩にあり、S 状結腸、直

腸、子宮、卵巣を一塊とし、Miles' 手術を行う。腺癌が壁内にびまん性に浸潤していながら直腸粘膜はほぼ正常で胃原発の転移巣と診断。現在術後 1 年 7 ヶ月、経過良好。

21. 脾頭部 solid & cystic tumor の 1 例

岡山赤十字病院	芝 武 彦	国 末 浩 範	今 井 茂 郎
	山 田 真 人	辻 尚 志	古 谷 四 郎
	川 上 俊 爾	小 野 監 作	大 塚 康 吉
	佐 藤 泰 雄	国 友 忠 義	

脾の solid & cystic tumor は、若年女性に好発し、きわめて悪性度の低い腫瘍であるが、当院では、1989 年の 2 例に続き、今回、脾頭部に

発生した 1 症例を経験したので、若干の文献的考察を加えて報告する。

22. 胸骨転移を来した肝細胞癌の 1 例

岡山大学第二外科	小野田 裕士	白 杵 尚 志	松 原 淳
	川 嶋 邦 裕	紀 計 二	山 下 和 城
	平 井 俊 一	小松原 正吉	寺 本 滋

近年、肝細胞癌の治療成績の向上により、長期生存症例が増加し、骨転移巣の症状が臨床問題となる場合がある。今回われわれは、肝細

胞癌の胸骨転移巣に対し内胸動脈より動注化学療法を施行し、腫瘤の縮小と疼痛の軽減を認めた症例を経験したので報告する。

23. PTCS, Nd-YAG レーザー, Z-stent を用いての胆道内瘻術の経験

岡山大学第 1 外科	津 下 宏	三 村 久	浜 崎 啓 介
	森 雅 信	折 田 薫 三	

悪性胆道狭窄に対して、PTCS と Nd-YAG レーザーを用いて胆道拡張後に Z-stent を挿入した 2 症例を経験した。この手技は、内瘻化不

能例に対しても胆道の開通を可能にし、十分な胆道内腔の確保と Z-stent の重ね合わせた挿入を可能とした。

24. 急性腹症を呈した小腸蜂窩織炎の1例

小田病院 富岡 憲明 小田 皓二 村松 友義

症例は88歳の男性で、急性腹症の診断で緊急手術となった。病変は回腸にみられ肉眼的に蜂窩織炎と診断した。またこの病変の約25cm肛側に潰瘍瘢痕による不完全狭窄が認められたので併せて切除した。病理組織学的検査では虚血性

小腸炎に2次感染が加わり蜂窩織炎を呈したものと診断された。本症例は腸管内圧の上昇、腸管微小循環障害、免疫能の低下などがからみあって発症した稀な1例と考えられた。

25. 術前診断の困難であった回盲部腫瘤の一例

津山中央病院外科 難波 浩 森山 裕熙 日下 泰徳
宮島 孝直 長江 聡一 黒瀬 通弘
徳田 直彦

77歳女性の回盲部腫瘤を、腹部血管撮影等の所見より、虫垂癌と診断し extended ileocecal resection を施行した。組織学的診断は periappendiceal granuloma で良性であった。腹部血管撮影における均質な hypervascularity は必

ずしも悪性を意味せず各種炎症でも起こり得る事、又悪性所見としては、early pooling 血管の encasement 等がより強い根拠となる事を反省した。

26. 回盲部軸捻転症の一例

おおもと病院 石賀 信史 村上 茂樹 庄 達夫
石原 清宏 酒井 邦彦 岩藤 真治
山本 泰久

症例は65歳女性、平成3年10月3日昼食後より腹痛、嘔吐を訴えて来院する。腹単X-Pにてイレウスと診断するも原因不明のまま保存的治

療を施行する。12時間後汎発性腹膜炎の症状を呈し、緊急手術となる。術中所見にて回盲部軸捻転症と診断し、右半結腸切除術を施行した。

27. 直腸平滑筋腫の一手術例

川崎医科大学消化器外科 小牧 隆夫 木元 正利 今井 博之
岩本 末治 牟礼 勉 笠井 裕
忠岡 好之 吉田 和弘 藤森 恭孝
山本 康久 佐野 開三

直腸平滑筋腫瘍は比較的稀な疾患である。最近我々は括約筋温存目的で経仙骨の腫瘤摘出術を行った直腸平滑筋腫例を経験した。自験例を

含む1991年までの本邦報告例（平滑筋腫107例、平滑筋肉腫151例）を集計し、診断・治療、特に術式について検討を加えた。

28. 教室における大腸多発癌の臨床病理学的検討

岡山大学第一外科 ルイス・フェルナンド・モレイラ 日 伝 晶 夫
岩 垣 博 巳 木 村 臣 一 折 田 薫 三

当科における大腸多発癌は358例中24例, 6.7%であった。男女比は16: 8で対照群と有意差なく, 発病年齢は56.8歳で, 対照群より4.4歳若かった。同時性多発癌では23病変中16病変, 70.0%が第一癌腫の10cm以内に存在し, 10cm以上離れた病変は進行癌が多かった。進行癌—早期癌の組合せが最多であったが, 異時性では後発癌は全例進行癌であった。多発癌群では癌家族歴, 他臓器重複癌の合併が高率の傾向があり, 腺腫合併率は83.3%で対照群より有意に高率であっ

た。同時性症例で術前正診できたのは77.8%であり, 正診不可であったのは第一癌腫のため, その口側の検索が不十分であったものがほとんどであった。

現在のところ, 大腸多発癌の予測は困難であり, 大腸の第一癌腫を診断した場合は多発癌および他臓器重複癌を念頭に置き, 十分な他臓器も含めた術前検査および術後の follow up が必要であると考えられた。

29. 教室における大腸他臓器重複癌の臨床病理学的検討

岡山大学第一外科 木 村 臣 一 岩 垣 博 巳 根 津 真 司
合 地 明 日 伝 晶 夫 折 田 薫 三

過去13年間の大腸癌初回手術358例中, 大腸他臓器重複癌は30例 (8.38%) であった。重複癌群と非重複癌群間に性別, 発症年齢, 大腸癌発生部位, 肉眼型に差はなかった。重複癌合併臓器としては胃が最多であり, 子宮, 肺, 膀胱,

前立腺, 乳が続いた。癌家族歴陽性率, 大腸多発癌合併率, ポリープ合併率は重複癌群で高く, 遺伝的癌素因の存在が示唆された。重複癌の存在を念頭においた術前検査, 術後 follow up が必要であると考えられた。